

## 博士論文

### 「大大蔵省」の研究 ―井上馨と明治国家建設―

東北大学大学院文学研究科歴史科学専攻

小幡圭祐

## 博士論文の主旨

本論文は、明治四年（一八七二）七月、井上馨の主張により、民政権を掌握する民部省を併合し、明治六年（一八七三）五月の太政官制潤飾と同年十一月の内務省建省によって権限分割がなされるまで、民政から財政に亘る絶大な権限を握った大蔵省、所謂「大大蔵省」が明治維新、特に明治国家の建設に果たした役割を考察するものである。

## 各章の要旨

### 序章

本章は、「大大蔵省」と明治国家、ならびに「大大蔵省」の制度・政策を巡る研究史を振り返ることで問題点を抽出し、本論文の取り組むべき課題を示した。

### 第一部 「大大蔵省」の制度

本部は、「大大蔵省」の制度の諸相を扱った。

### 第一章 「大大蔵省」の前提―井上馨の「大大蔵省」論―

本章は、井上馨の「大大蔵省」論の形成過程を論じるものである。これまで井上の構想については、その内実や変遷まで論及する研究は僅かであった。本章では、幕末における彼の経験から民政観・財政観の形成を明らかにし、更に、彼が明治政府に出仕してから廃藩置県に至るまでの構想の推移から「大大蔵省」論の形成過程を明らかにした。

### 第二章 「大大蔵省」の成立と展開―「大大蔵省」の政策過程と太政官制潤飾―

本章では、井上の腹心である渋沢栄一を中心とする「大大蔵省」の成立過程、更に成立した「大大蔵省」の運営について政策立案・意思決定過程の実相を中心に検討した。また、先行研究が「井上派大蔵省」の「崩壊」と位置付ける明治六年五月の太政官制潤飾を、渋沢の制度改革案と改革の実際から、むしろ「展開」と位置付けられることを指摘した。

### 付章 明治四年の制度取調―渋沢栄一の「内閣」構想と「大大蔵省」―

本章は、明治四年の太政官三院制の形成過程を論じた。第二章で明らかにした、明治六年五月の太政官制潤飾は、井上の構想には存在しない「内閣」を設置するという改革でもあった。本章は、この「内閣」設置の理解を深めるため、その前提としての渋沢栄一の「内閣」構想を検討するものである。

### 第三章 「大大蔵省」の解体―内務省建省と「大大蔵省」―

本章は、「大大蔵省」の解体として、明治六年十一月に設置された内務省の建省過程を扱った。これまで内務省の建省については、「新設」された省として「大大蔵省」とは別個にその建省過程が論じられることが多かったが、本章ではこれを「大大蔵省」の「分省」としての性格を重視し、分割される「大大蔵省」と内務省建省の関係を重視し検討した。

### 第二部 「大大蔵省」の政策

本部は、「大大蔵省」の政策の諸相を扱った。

### 第四章 井上馨の富国構想と「大大蔵省」勸農政策

本章は、井上馨の富国構想と「大大蔵省」の施政方針を論じた。先行研究における「大大蔵省」に対する見方は、財政的視点のみが重視され、民政的視点が蔑ろにされる嫌いがあった。本章では、井上の富国構想と、井上が主導した「大大蔵省」の施政方針を検討することで、民政の中でも勸農政策と対地方政策を重視していたことを明らかにした。

### 第五章 「大大蔵省」勸農政策の展開過程

本章は、「大大蔵省」の勸農政策の実施過程を論じる。先行研究では、「大大蔵省」期の勸農政策については、緊縮財政の強化に伴い放棄されたとの見解が一般的であった。本章では、「大大蔵省」が勸農政策実施にあたって重視していた基調を抽出した上で、緊縮財政期においても一貫して勸農政策は実行されていたことを明らかにした。

### 第六章 大隈重信と「大大蔵省」勸農政策

本章は、井上の辞職後、大隈重信の下で展開された勸農政策の動向を明らかにするものである。先行研究では大隈も井上と同様に東北開発を実行したとされているが、その意図は具体的に論じられてはこなかった。本章では大隈の構想と勸農政策の関係を明らかにし、その上で勸農政策の実施過程を内務省によって行われる勸業政策の前提として論じた。

### 第七章 井上馨の地方構想と「大大蔵省」対地方政策

本章は、「大大蔵省」の対地方政策の展開過程を論じる。これまでの研究では、井上の地方認識や地方制度の立案過程については詳しくは論じられてこなかった。本章では、井上の廃藩前後の地方構想を確認した上で、地方の枠組みを規定した「県治条例」の制改定過程から、「大大蔵省」の対地方政策の特質を、内務省の対地方政策の前提として論じる。

### 終章

本章では、各章で明らかにした論点を総括し、「大大蔵省」が明治国家建設に果たした役割について、その見通しを提示した。

## 論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	小幡 圭祐
論文審査担当者	(主査) 教授 安達 宏昭 教授 柳原 敏昭 准教授 堀 裕 准教授 浅岡 善治 准教授 籠橋 俊光
論 文 名	「大大蔵省」の研究―井上馨と明治国家建設―
<p>本論文は、明治初年における「大大蔵省」の制度と政策について、その構築と展開において主導的な立場にあった井上馨の構想や動向を中心に考察したものである。当該期の大大蔵省は、民政から財政にわたる大きな権限を有したため「大大蔵省」（以下、「」を省略）と呼ばれる。</p> <p>序章は、政治史、行政史等に関する研究史を整理し、本論文の課題を設定している。</p> <p>第一部は、大大蔵省の制度的な考察を行っている。第1章は、設置を企図した井上の民政観・財政観を明らかにし、その構想の内実と変遷を追い、大大蔵省設置へと向かう過程を検討している。第2章では、省の成立と展開を扱い、その運営方針や実態について、「カガミ」の定式化や諸務局の位置づけを分析し、政策立案・意思決定が機構面で確立する様相を明らかにするとともに、それが政府全体に波及する過程も解明し、太政官潤飾を再評価している。付章では、大大蔵省設置の前提となる太政官三院制の形成過程を論じている。第3章は内務省の設立過程を分析し、大大蔵省の財政方針や政策立案・意思決定方式が導入されたことを明らかにした。</p> <p>第二部は、大大蔵省の政策を分析している。第4章では、井上の富国構想が勸農政策重視に結びつき、勸業資本金制度の設立などが行われたことを明らかにした。第5章は、勸農政策が模範試験場と東北開発において実施され、その過程で民営主義が採られたことを解明した。第6章では、井上辞職後の大大蔵省の勸農政策が考察され、大隈重信事務総裁のもとで変更が加えられながらも、租税権頭であった松方正義のもとで継続し、その後の内務省に引き継がれた点を明確にした。以上の三章により、これまで不明確であった内務省以前の勸農政策の実態が明らかになり、その連続性が確認された。第7章は、廃藩置県前後で井上の対地方構想が変化することを指摘し、県治条例の制改定過程において、大大蔵省が地方管轄権を掌握しようとしたことを明らかにするとともに、それを阻止する太政官正院との対抗関係の構図を浮かび上がらせた。</p> <p>終章は本論文の成果をまとめ、大大蔵省からみた近代国家形成における論点を整理するとともに、今後の課題を挙げている。</p> <p>これまで、大大蔵省を巡る政治問題の研究が進んできたが、そのものについては充分ではなかった。これに対して、本論文は数多くの史料を収集し、文書論的な視角を含めて綿密に分析することにより、省内の行政機構整備の様相とそれが政府全体に与えた影響を解明した。また、勸農政策の重視とその実態などを明らかにして、政策の通説的な理解に再検討を加えた。そして、近代国家建設において井上および大大蔵省が果たした役割の重要性を指摘し、新たな歴史像を描き出している。その成果は日本近現代史研究の発展に寄与するところ大であるといえる。</p> <p>よって本論文提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	